



笑顔いっぱい いのちかがやけ 花園の子

花園

小樽市立花園小学校

学校だより No. 6

令和7年8月28日↓本校

☎ 25-5233
Fax 25-5234



災害時の人々の姿から学ぶ「共助」の大切さ

校長 五十嵐 宰

28日間の夏休みが終わり、学校に元気な子どもたちの姿が戻ってきました。夏休み期間中には、新聞などの報道で毎日のように水の事故や災害、交通事故、クマの出没情報があり、本校の子どもたちは元気に過ごしているのだろうかと心配に思っていました。大きな事故や怪我もなく、元気に2学期の始業式を迎えられたことを大変うれしく思います。近年、北海道でも暑さが関東・関西並みになり、暑い夏が当たり前ようになってきました。2学期も空調設備を有効に利用して、教室の子どもたちを暑さから守りたいと思います。

さて、1923年(大正12年)9月1日、マグニチュード7.9の大地震(関東大震災)が起こり、建物が崩れたり火事に巻き込まれたりして、10万5375人の尊い命が奪われました。1959年(昭和34年)9月26日には、5098人の尊い命が奪われるなど大きな被害を出した「伊勢湾台風」。これらの自然災害がきっかけで、伊勢湾台風の翌1960年(昭和35年)に9月1日が「防災の日」と制定されました。まさにその防災の月に、北海道で観測史上初となる震度7を記録する「胆振東部地震」が発生しました。7年前の9月6日のことです。「胆振東部地震」では、41名の尊い命が失われ、発電所の破損により、北海道全域で停電となる「ブラックアウト」が起こりました。交通機関、物流がマヒし日常生活に大きな支障が出ました。通信網も停電が長引くことで遮断され、臨時休校の連絡も滞る状態が全道各地で発生しました。私たちの生活がいかに電力に依存しているものかと改めて考えさせられました。

こういった災害が起こるたびに様々な課題が浮き彫りになりますが、一方で「共助」の大切さや素晴らしさを感じることができます。「胆振東部地震」では、信号機が停止している中で安全のためお互いに譲り合うドライバーの姿。高層マンションに住んでいる高校生が、高い階に水を運べないお年寄りのために SNS で呼びかけ仲間を集めて、水を運ぶお手伝いをしていた姿。自身も被災者である厚真町の子どもたちが、避難所で食べ物を配るお手伝いをしていた姿。災害時、「自助」:「共助」:「公助」の割合は、7:2:1に振り分けられるといえます。実際、「阪神淡路大震災」においても、土砂やがれきに閉じ込められた際の救出作業は、約98%が「自助」「共助」によるものでした。防災の基本は「自助」ですが、自分でできることにはやはり限界があります。危機的状況にある時こそ、互いに「譲り合う」「助け合う」ことが必要であり、人の温かさを身近に感じることはできないのでしょうか。

そういった災害で被害に遭わないように、学校では避難訓練を行ってきました。今年度は6月に「火災」を想定してグラウンドに逃げる訓練を行いました。今後は「地震」を想定した避難訓練を菁園中学校と合同で行います。避難する場所は、ほとんどが「屋外」ですが、指定された場所の時もあるので、「どこに逃げたらいいか」は、避難指示、緊急放送を見聞きしなければいけません。この時に、「自助」だけでなく「共助」の姿を期待して指導していきたいと思います。

「自助」～自分の命は自分で守る・助けること 「共助」～家族、企業、地域などの小さなコミュニティで助け合うこと
「公助」～行政や関係機関による救助・支援のこと